15-16世紀西欧の恋愛と結婚の奇跡：
Part01 結婚愛の誕生

鈴木繁夫
［名古屋大学大学院国際言語文化研究科・教授］

結婚愛の確立

- 「スイカズラのあずま屋」
- ルーベンスとイサベラ・ブラント
- (1609–10年頃)

画家ルーベンス

- 17世紀フランドル（アントワープ）の画家

- イタリアでの修行。
- 絵画が外交交渉に利用
- 本人も外交官として活躍

時代の雰囲気

- ローマ教皇に対する世俗権力の優位
- 宗教に対する人間の理性の肯定
- 国家間の戦争・紛争が頻発

一目惚れ

- 「兄はあまりにもすばらしい花嫁を見つけた。とても真似することはできないようだから、結婚はずっと先のことになると思う。」
- 「美しくて教養高く、優雅で血筋も良く、裕福な育ちの女性」」(1609年春)。

- 数ヵ月後に、兄嫁の姪（10歳以上年下）と結婚。

ルーベンスの邸宅

- 右手を握り合う･重ねあわせる
- 結婚の誓

妻の死:15年後

「改めて人間の運命というものについて考えさせられました。それは、私たちの人を愛する気持ち　とは必ずしも相容れないもので、しかも説明のつかない理不尽さを伴う、神の御心の現われなの　です。すべての物事を支配しようとするその力は強大で、私たちは逃れようもなくその力に従う　以外ありません。私が思いますには、運命に逆らうことなどとうていできないわけですから、こ　の不幸を少しでも名誉あるものと理解して苦痛を和らげるためにも、運命とはそういうものだと　納得するほか仕方のないことのようです。とはいうものの、今の段階でそう思い込むのは容易な　ことではありませんし、とてもそう納得できるとも思えません……。唯一の慰めは、人はいつか　忘れる定めにあるということだけです。この悲しみと喪失感を早く忘れてしまいたいと思う、一方で、する人の思い出は一生忘れたくないと強く願うのは矛盾することなのですが……。」岩渕潤子『ルーベンスが見たヨーロッパ,"』(筑摩書房, 1993)

「深く愛すること。強く生きること。」

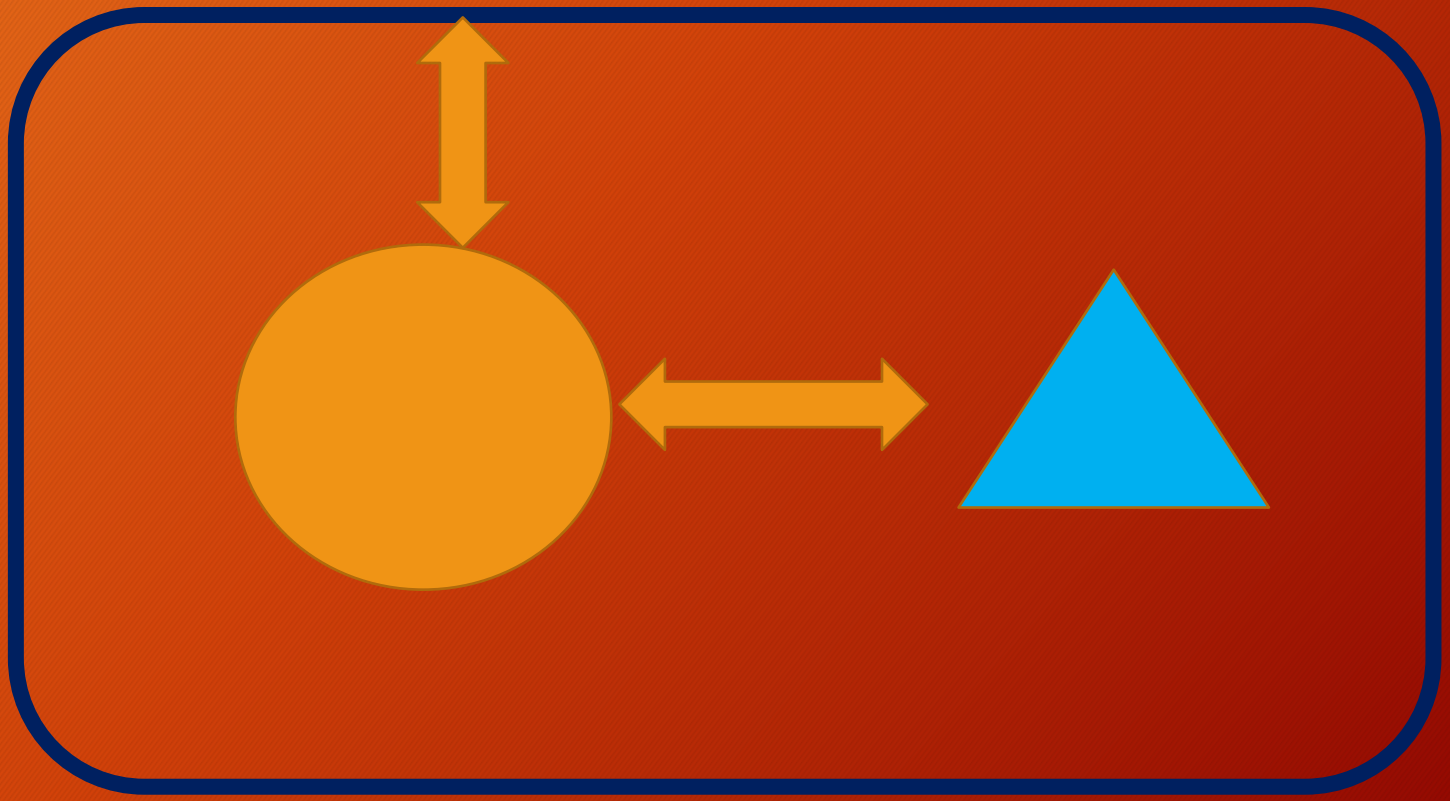
子供としての恋愛？

「思うんだけど人って、
十八と十九の間を
行ったり来たり
すべきなのよ。
十八が終わったら
十九になって、
十九が終わったら
十八になるの」

子供

永遠に子供のままでいたいという願望をなぜ持つのか？

型：三つの方向で考える



型：三つの方向で考える

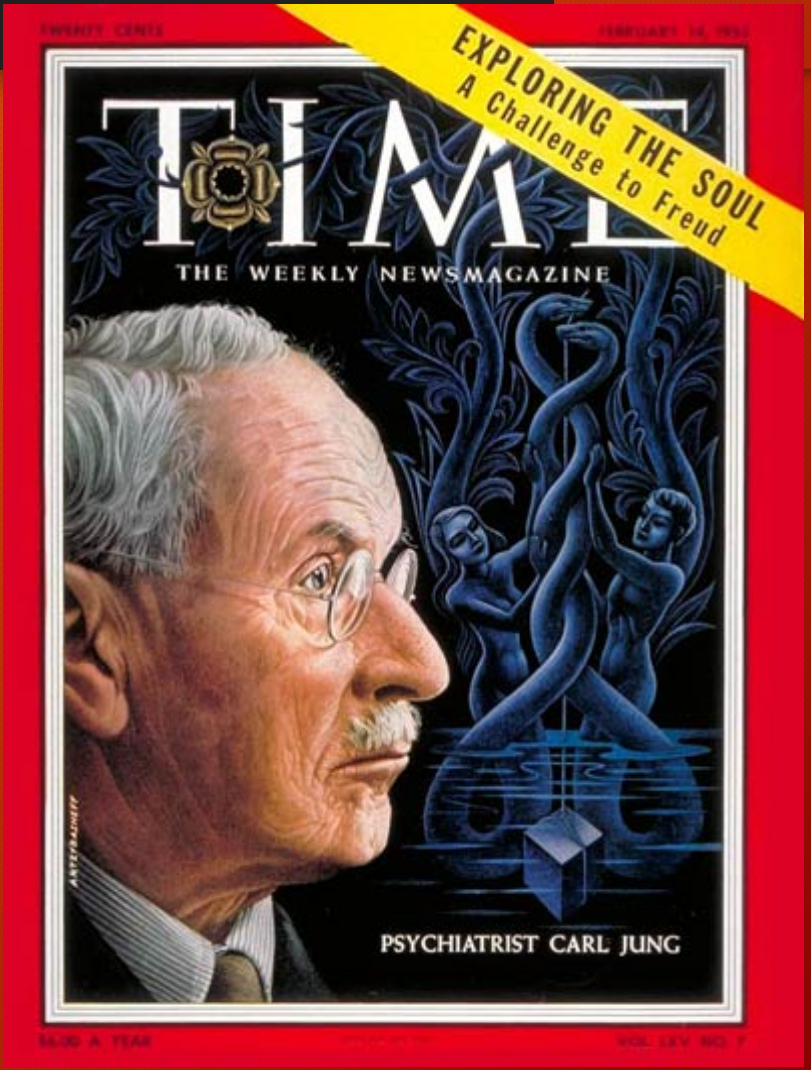
- 問われている対象の「らしさ」：
  - 子供の本質
- 対象と対立するものとの「違い」：
  - 子供と大人との相違
- 対象を包含するものとの「つながり」：
  - 子供を囲む社会への子供の関係

型：三つの方向で考える

- 子供の本質
  - 可能性と未知が広がっている
- 子供と大人との相違
  - 個人化（自立・自律）→義務・責任
  - 全能感の大きさ
- 子供を囲む社会への子供の関係
  - 全能感を保障→見たくないものは見ない
  - 幻想の授与→「らしさ」

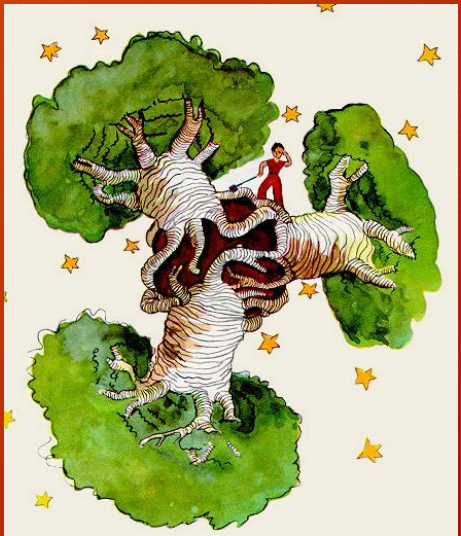
子供 vs 大人：深層心理学の見方

- 「永遠の少年」puer aeternus
  永遠に子供ままでいたい
  1. 大地（現実）に触れたくない
  2. 大人への無関心
  3. 幼稚な空想力



星の王子様:永遠の少年puer aeternus

永遠に子供ままでいたい
1. 大地(現実)に触れたくない
2. 大人への無関心
3. 幼稚な空想力



子どもとしての恋愛と自殺

「思うんだけど人って、
十八と十九の間を
行ったり来たり
すべきなのよ。
十八が終わったら
十九になって、
十九が終わったら
十八になるの」

「自分自身としては若さと青年期を抜け出したくないのに、成長過程だけはいやおうなく進行し彼を破壊するのだ。

彼らは、それによって問題を乗り越えていくべき当の要因によって殺されるのである。」

（M.-L.フォン・フランツ『永遠の少年』）

子供

永遠に子供のままでいたいという願望をなぜ持つのか？

1. 大地（現実）に触れたくない

　　触れようとして失敗→肉体関係が不全

子供

失敗への恐怖

●大地

1.「家族の二機能」

（精神的領域「愛情原則」+経済的領域「自助原則」）

2.「女性の三位一体」（男性の三位一体）

（性的関係→結婚→母親になる）

<永遠の少年>のあきらめ

「龍の腹から出る聖女マルゲリータ」

「外的世界、内的世界を問わず、何か真剣に取り組まねばならないことが持ち上がると、二、三しくじりをやらかしただけであっさりあきらめてしまう。」

（M.-L.フォン・フランツ『永遠の少年』）

大人の＜死＞：家族の意味？

- ミドリの父親：書店主

夫婦の愛情　vs　親子の愛

- 「俺は今とても悔しい。俺はお母さんを亡くすよりはお前たち二人を死なせた方がずっとよかった」。

夫婦の愛情は深いのか？

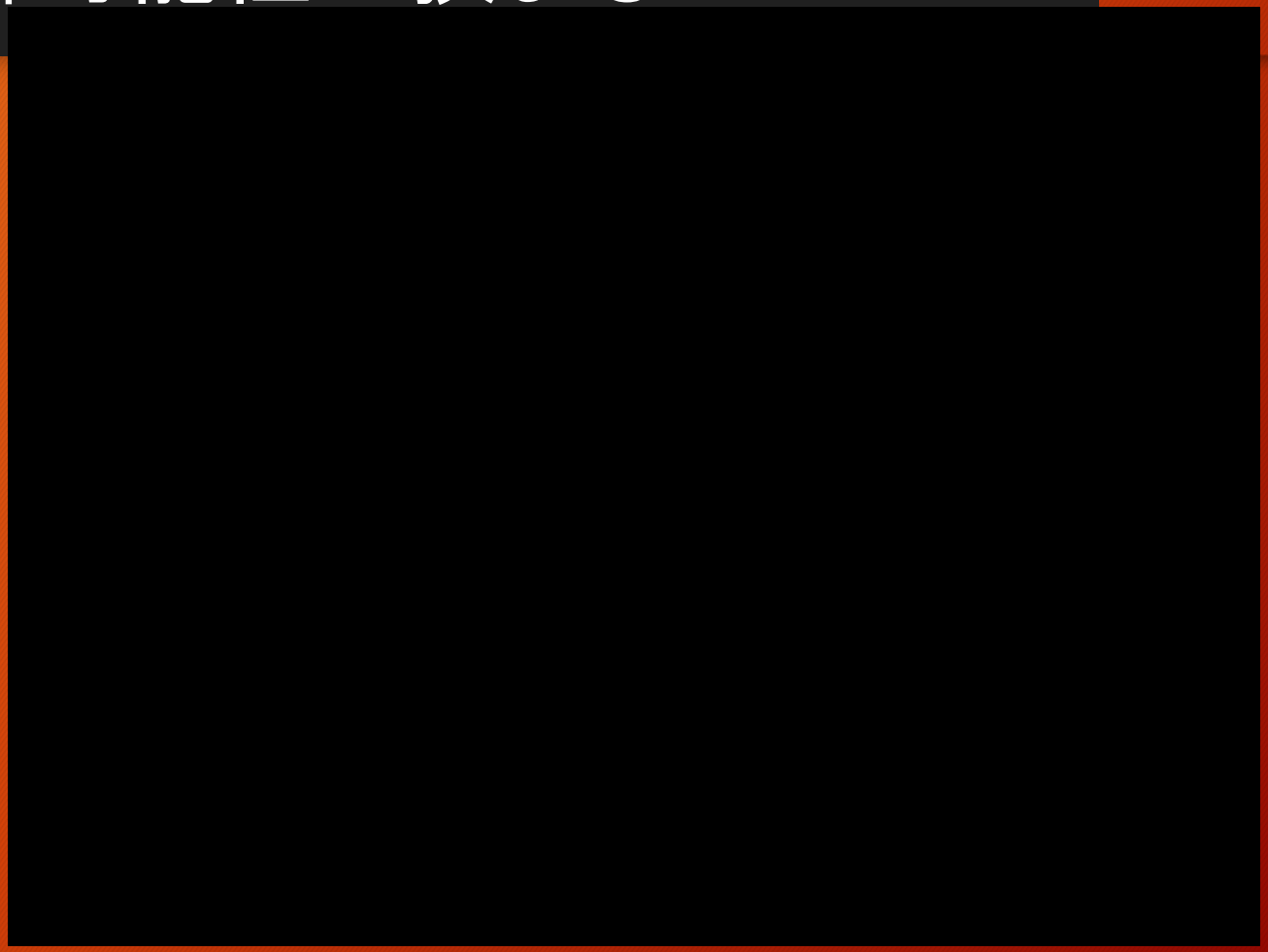
妻の疾走：愛情は持続しない

「いま言っているのは、最初に恋したあのエイミーと、かろうじて似ている感じのする、今のエイミーのことだ。おとぎ話の変身の逆バージョンだ。結婚して数年すると、あの昔のエイミーは…脱皮して、今の冷たく恨みを抱くエイミーになってしまった。妻はもう妻ではない」。

（5年目の結婚記念日に、警察でのダンの個人的述懐）

夫婦の愛情:
互いの了解可能性が狭まる

- 「消えたあの女」Gone Girl



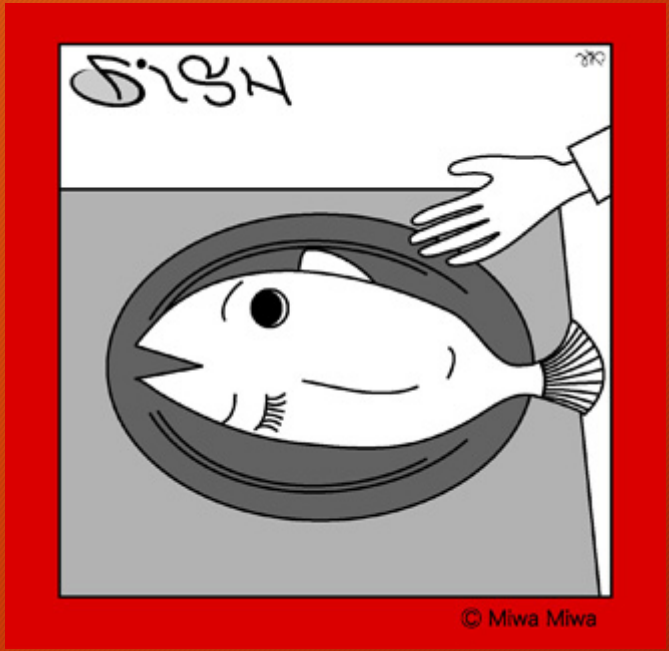
了解不可能性が高まる

「『いったい何を考えているんだ』というのが、声には出さないし、答えられそうな人に尋ねるわけではないが、結婚していて一番よく自問自答することだ。嵐の雲のように誰の結婚でも覆っているのは、『お前、何を考えているんだ』、『お前、何者なんだ』、『僕達互いに何をしてきたんだ』、『これから何をするんだ』という自問自答だ」。

（5年目の結婚記念日に、ダンの個人的述懐）

相手の操作：自覚 vs 無自覚

- 「消えたあの女」Gone Girl
  - 夫が妻を操る　　妻が夫を操る



操作の主導権掌握

- 「出版社と契約を結んだ。これで私は公にニックとの物語を掌握したわ。物語の掌握って、象徴的ね。所詮、結婚なんて物語なんだから。妻がこういった、夫がこういったという長いゲームなんだから」（術中に陥れた夫の態度についてのエイミーの個人的述懐）

自己利益の追求

- 「一年前の今日、夫を抹消しようしていた。でも今は、夫を夫らしくする作業はほぼやり終えたわ。…この男、無条件を私を愛することができるようになってきている。」

（術中に陥れた夫の態度についてのエイミーの個人的述懐）

これ以後のスライドは授業と無関係です

＜影＞の寄り添いと統合

自殺

- 『若きウェルテルの悩み』
  - 「少年」は自殺するが、ゲーテ自身は生きのびる

リリシズム（叙情性）

- 彼の作品は現代の神経症の表現といえるかもしれない。しかし彼は、自分の神経症的な状況を非常に美しく「描いて」みせた。問題を「提起」してみせた

行動療法と仕事

- ワタナベの仕事
- レコード販売と肉体労働

大人の愛情

- 現実的な仕事と出産
- 忍耐による＜退行＞

階層化の「2005年体制」

- 「中流化の1955年体制」から、階層化の「2005年体制」

- 容姿がよいか、性格がよいか、家柄がよいか、頭がよい必要がある。そのいずれも十分に持たない女性は、年収の低い男性で我慢
- 干物女

- 。人格の弱い人は短絡反応を起こしやすい。つまり'最終決定を迫られると'ど
- ちらか1万を選んで他方を切り捨ててしまうのである。1定以上の緊張状態に耐えられないの

- 自分自
- 身としては若さと青年期を抜け出した-ないのに'成長過程だけはいやおうなく進行Lt彼を破壊
- するのだ。彼らは'それによって問題を乗り越えてい-べき当の要因によって殺されるのである。

- 出典：http://netatama.net/archives/8560222.html

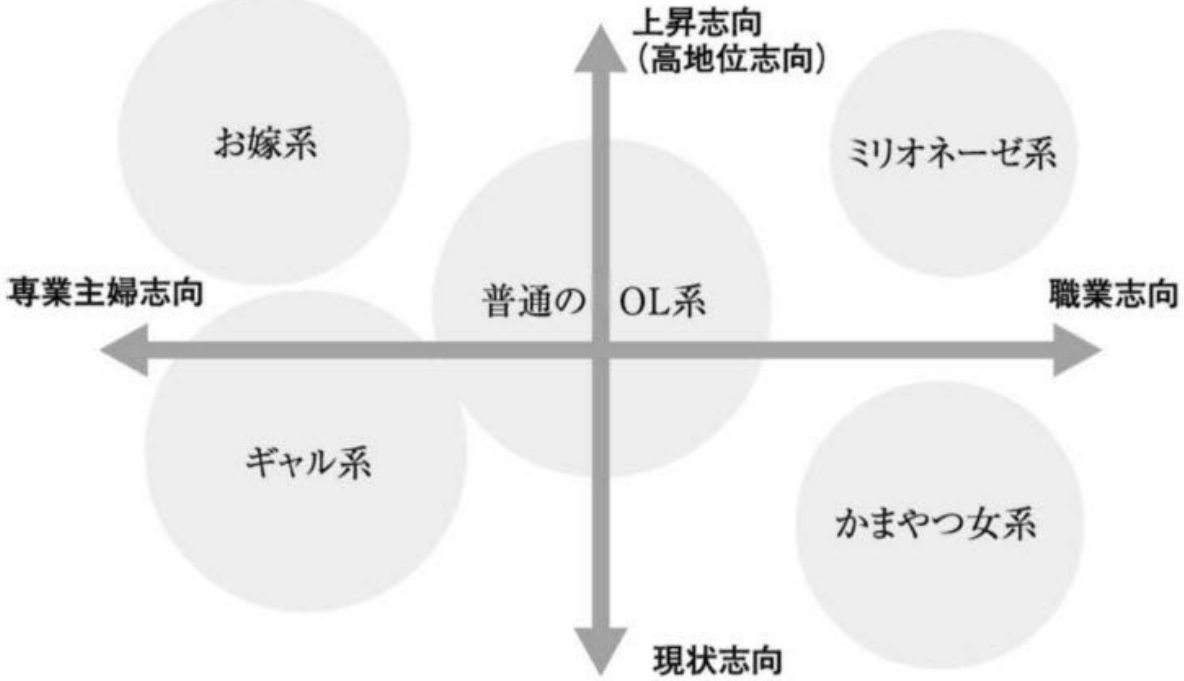
- 名古屋嬢とは、ピンクをどこかに取り入れたコンサバティブなファッション、髪は内側にくるくると巻き、ブランド物が好きな女性で、名古屋地方に多い

http://www.zakzak.co.jp/entertainment/ent-news/photos/20130417/enn1304171531012-p1.htm

[redacted]

- かまやつ女とは夏なら古臭いおじさんみたいな帽子・冬ならニット帽をかぶって、髪はもっさり、服装はラフでゆったりしたものを着た女子のことである。

図2-1　女性の類型化



（注）かまやつ女とは三浦展の造語であり、最近の若い女性の中で増加しているファッションの類型。価値観としてはマイペース、自分らしさ、楽ちんを志向しつつ、手に職志向であり、専業主婦志向がない女性を指す。（三浦展『「かまやつ女」の時代』参照）

資料：カルチャースタディーズ研究所作成

中流化の1955年体制

日本社会（1980年以前）

- 少し愛して、なが～く愛して→強く愛して、短くていいから
- 大原麗子

- 1. 恋愛は結婚に至らない、そして結婚は恋愛を保てない：
- Gillian Flynn, Gone Girl (2012) , 村上春樹『ノルウェーの森』(1987)
- 2. 聖書が示す恋愛と結婚愛：
- John Milton, Paradise Lost (1664) 第4および6巻：
- 3-5. 恋愛にはパタンと教養が必要：
- William Shakespeare, Romeo and Juliet (1595)
- 6. 中間発表 (1)：小テスト, 意見文発表, 作品暗誦
- 7-8.深い相思相愛は結婚愛へと成就しない：
- Emily Bronte, Wuthering Heights (1847)
- 9-10.恋愛から結婚へと主導権を握る女性
- William Shakespeare, The Merchant of Venice (1598)
- 11. 恐るべき女の愛の力
- John Keats, "La Belle Dame Sans Merci" (1884)
- 12. 中間発表 (2)：小テスト, 意見文発表, 作品暗誦
- 13-14. 地位と安定を目指す結婚が永続する不思議
- Jane Austen, Pride and Prejudice (1813)
- 15. 恋愛と結婚観の総括および小テスト